

石井忠雄作 「暗やみに光を」

< 前編 >

第1場 朝鮮・ケソンのキム・ミョンシユクの家

ナレーション わたしの名は、キム・ミョンシユク。今年で 67 歳になる韓国人です。今日は思い切って、日本の皆様に、これまでだれにも語らなかつたわたしの半生をお話したいと思います。あれは太平洋戦争たけなわの 1942 年、日本の年号で言えば昭和 17 年のことでした。

当時わたしは、朝鮮のケソン(京城)にいました。父は牧師でしたが、教会は日本軍によって破壊され、多くのクリスチャンは強制労働で日本に連れていかれてしまいました。母は地主の娘で、わたしはその時まで何不自由なく過ごしてきました。

ミョンシユク お母さん。お母さんの娘時代はどう過ごしたの？

母 わたしの娘のころはよくキキョウの根を摘みに行つてね。楽しかったよ。広い庭にそれを広げて。

ミョンシユク それで、お父さんとはどこで知り合つたの？

母 わたしがまだミッションスクールに通つていたころ、お父さんはまだ牧師様になる勉強中で、たまたまわたしの学校の礼拝にほかの牧師様についてきたの。

ミョンシユク そこで一目ぼれというわけね。わたしも牧師様と結婚しようかな。

母 お父さんみたいな、すてきな人がいたらね。お前は器量がいいから、きっとすてきなお嫁さんになれるよ。

ミョンシユク お母さんは幸せ？

母 それはもう。お父さんはいい人だから。お前も幸せになるんだよ。それにしても早く戦争が終わらないかね。日本軍が早く出ていってくれるといいね。壊された教会を立て直して、みんなを呼び集めるのが、お父さんの夢なのよ。

父 帰つたよ。

母 ああ、あなた。お帰りなさい。

父 おい、何か変だぞ。村に巡査が来てる。

ミョンシユク 何かしら。まただれか強制労働で日本に連れていかれるのかしら。怖いわ。

母 ミョンシユク、怖がることは何もないんだよ。イエス様がわたしたちをお守りくださっているんだから。

巡査 (ドンドン戸をたたく音)キム・ヒョンスはいるか？

ミョンシユク うちだわ。うちには男はお父さんしかいないのに。まさかお父さんを！

巡査 (なおも戸をたたく音)キム・ヒョンスはいないのか？

父 はいはい、ヒョンスはわたしですが。どんなご用でしょう。

巡査 ああ。(セキ払い)ええ。朝鮮人がお国のためにお役に立つ時が来た。そのことでぜひ協力していただきたい。(セキ払い)ええ、このたび16歳以上の女子に対し、志願によって特別に大日本帝国陸軍の軍属として、奉仕する道が開けた。これは「女子愛国奉仕隊」といい、前線で戦っている兵士のために働く。これは志願であるが、応募が多いと選考に困るので、こちらで選んだ。お前には娘がいるだろう。すぐ出頭するように。

父 ちょっとお待ちください。うちの娘はまだ17で、それに一人娘です。娘を連れていかれたら、わたしはどうすればいいんです？

巡査 お国のために名誉になることだ。それにすぐ帰れる。逃げようなんて気は起こさんほうが身のためだぞ。

母 どういうことです、お父さん？

父 わたしにだって分からない。なぜ女子が必要なんだ？

母 もしかしたら…。でも、そんなことあり得ない。

ミョンシュク そんなことって？

母 何でもないよ。心配することは何もない。イエス様が守ってくださるよ。

父 そうだ。何かの間違いかもしれない。明日になれば、「間違いだった」って言うよ。

ナレーション その夜のことでした。父と母が寝ているわたしを起こしに来ました。

父 ミョンシュク。さあ、逃げるんだ。早く支度しなさい。

ミョンシュク でも、どうして？

母 何も言わずに逃げたほうがいいのよ。

ミョンシュク お父さんやお母さんは大丈夫なの？

母 わたしらは老い先短いからどうなったって構いやしない。でもお前はまだ若いんだから。

父 早くせんか。気づかれましたら何にもならんよ。

ナレーション そしてわたしたちは真夜中にそっと家を出ました。その時でした。

巡査 そんなことだと思って網を張っていたんだよ。もう出てくるころだと思っていたら、案の定。(鼻で笑う)おいみんな、娘をふん捕まえる！

父 やめなさい。おい、ミョンシュク、逃げるんだ。

母 どうぞわたしを代わりに連れて行ってください。

巡査 邪魔をするな。おい、構わん、こいつらを撃ち殺せ。

ミョンシュク やめて。お父さん、お母さん！

(効果音) (「バーン、バーン！」とピストルの発射音数発)

ミョンシュク お父さーん！ お母さーん！(泣き崩れる)

巡査 お前もこうなりたいか。

ミョンシュク
巡査

殺して。殺してください。
そうはいかん。お前をだんなが待っているからな。さあ、連れていけ。

第2場 北支のある町の慰安所「夕霧楼」

ナレーション

それからのわたしは、言葉では言い表せないほどの辱めを受けて、中国北部にある「夕霧楼」という日本兵の慰安所に送られました。軍の慰安所というのは、兵士の性のはけ口を提供する女性がいるところで、古くは日清戦争のころから隋軍女婦とか従軍女婦とか言われて、軍に随行していた女性がいました。しかし、昭和7年の第一次上海事変ころからは、軍の要請で慰安婦を日本本土から招くようになり、やがて戦火が広がるに連れ、わたしも朝鮮人女性も駆り出され、その数は増していったのです。慰安婦の中には、日本本土で娼婦しょうぷをしていた人で、貧しさからの借金を返すために来ている人、自ら進んで来ている人など様々でしたが、多くは朝鮮から強制的に連れてこられた女性でした。日本人なら、借金がなくなれば自由の身になれるのですが、わたしたちにはその保証がありません。

わたしはここでは玉枝と呼ばれ、毎日多くの日本兵の相手を務め、見も心もボロボロになりました。それでもわたしは、イエス様に毎朝毎夜祈り、父の形見の聖書を読むことを忘れませんでした。そして、父や母が口癖のように言っていた、「イエス様はどんな時にもお守りくださる」という言葉を心の中にかみ締めては、涙をじっとこらえていました。

そんなある日、一人の若い客が訪れました。

鈴木二等兵
玉枝

やあ。初めてです、こんなところに来るのは。
そう。できるなら、こんなところへは来ないほうがいいわ。ねえ、どうして何もしないの？ お金損するわよ。

鈴木
玉枝

きれいだ。君はとてもきれいだ。自分は、見ているだけで十分だよ。
変な人ね。どうぞ勝手に。

ナレーション

その人は、鈴木という二等兵でした。わたしには、その人というほんの一時がとてもありがたく思えました。その時が、一日の中で体を休める唯一の時間だったので。わたしは彼が来るのを心待ちにするようになりました。彼も毎日のようにわたしを訪ねてきました。取りとめもない話の中から、彼が心の優しい兵隊であることが分かりました。彼は、朝鮮で日本人がわたしの両親を殺したことを激しく怒り、わたしに赦ゆるしてほしいとわびました。そして私が話すイエス様のことにも、黙って耳を傾けてくれました。そんな彼にわたしはだんだん好意を持つようになったのです。そんなある日

鈴木
玉枝

玉ちゃん。自分はもうダメだ。
鈴木さん、どこから入ってきたの？ どうしたのよ。

鈴木 今日、中国人捕虜の虐殺が行われたんだ。自分たちが一人一人を銃剣で突き殺すんだ。「自分にはできない」というと殴られて、無理やりやられた。でも突くことはできないでいるうちに、捕虜が逃げてしまった。このままでは銃殺だ。自分はもうここにはいられない。

ナレーション その時でした。足音も荒々しく憲兵が乗り込んできたのです。

憲兵 おい、ここに兵隊が来なかったか？

男 へえ、真っ昼間ですから、お客さんはまだ、だれも…。

憲兵 客じゃない。脱走兵だ！

男 そういや、玉枝の部屋にだれかが来ているようですが。

憲兵 そいつだ。入るぞ。(玉枝に)おい、お前のところに来た兵はどこにいる？ 隠すとためにならんぞ。どこにやった？

玉枝 そんな人いません。知りません。出ていってください。

憲兵 そんなはずはない。おれの目は節穴じゃないぞ。よし、探せ！（鈴木を見つける）ああ、こんなところにいやがった。よし、女もろとも縛り上げて連れてゆけ。

ナレーション 憲兵は、押し入れに隠れていた鈴木さんを引き出すと、わたしと一緒に憲兵隊に連れていき、殴るけるの暴行を加えました。日本兵は、捕虜を殺したり、略奪暴行などをしたりすることで、一人前の兵隊になると考えているようでした。わたしは、激しい殴打に体が動かなくなりました。散々脅された挙げ句、わたしだけは許されてやっとの思いで家にたどり着いたものの、夕霧楼を訪れる兵士の数は多く、わたしは休むことができませんでした。

玉枝 (息も苦しそうに)だんなさん、少し休ませてください。わたし、もう…。(ドサリと崩れ倒れる音。)

主人 しょうがないなあ、こんな時に。逃亡兵をかくまい、おれの顔に泥を塗りやがった上に、書き入れ時のこのザマだ。よし、見せしめだ。少し焼きを入れてやろう。

ナレーション わたしはみんなの见ている前で裸にされ、ムチでしたたか打たれました。

玉枝モノローグ (祈り)イエス様、何でわたしはこんなに苦しまねばならないのですか？ どうぞ命を取ってください。

ナレーション そう祈ると、わたしは目の前が真っ暗になり、スーッと奈落のそこに引き込まれていきました。

(音楽) (重苦しい感じ)

< 中編 >

ナレーション 丸 1 週間というもの、わたしは死んだように布団の上に横たわっていました。あの時死ななかったのは、きっとイエス様が命を守ってくれたのでしょう。それから3か月ほどたち、やっとうちにか元の生活に戻れそうになったある日、夕霧楼の主人がニコニコしながら部屋に入ってきました。

主人 やあ、玉枝。どうかね。すまんかったね。軍の命令ではようがなかったんだよ。痛むかね？ いや、そこでおいしいまんじゅうを買ってきたから、食べないかい？ 今日はいいい知らせを持ってきたんだよ。お前は朝鮮だったね。国に帰れることになったんだよ。うれしいだろう。

玉枝 本当ですか、だんなさん？

主人 本当だ。ここ一日二日のうちに、船に乗れるよ。だから身の回りのものを整理しておくんだね。

玉枝モノローグ (祈り)イエス様、ありがとうございます！

ナレーション 故国を離れて2年。本当に帰れるなんて。うれしくてうれしくてその晩は眠れませんでした。

第3場 船中

ナレーション こうして1945年5月、わたしはナホトカの港から船に乗りました。プサンまではほんの3昼夜、そこから汽車で一日乗れば、わたしは父母の眠るふるさに帰れるのです。

(効果音) (「ポー！」という船の汽笛)

ナレーション ところが、丸4日過ぎても陸地は見えず、おまけに船内は異常に熱くなってきました。

玉枝 何だか蒸しますね。あの、この船、本当に朝鮮に行くんですか？

慰安婦A お前さん、超船に行くつもりかえ？ それじゃ乗り違えだ。この船はね、フィリピンのレイテに行く船だよ。

玉枝 だって、だんなさんが朝鮮行きはこの船だって乗せてくれたんですよ。

慰安婦A あらあら、朝鮮へ行く船など、ここから出ちゃいないよ。あんた、だまされたんだよ。わたしたちはフィリピンへ行くんだ。この体で稼ぎにね。

玉枝 え？ フィリピン?!

慰安婦A お前さん、夕霧楼だって言ったね？ あそこのおやじは、娘がダメになるとよくほかに売り飛ばすという評判だからね。戦況が思わしくないで、フィリピンなどでは部隊を増強していて、女は何人いても足りないくらいだというから、お前さんやられたんだよ。かわいそうにね。

ナレーション 体中の力がスーっと抜けて、わたしはそのままデッキにうずくまってしまいました。

玉枝モノローグ (祈り)イエス様、どうして...？

ナレーション わたしの言葉にならない祈りは、暗い波間にむなしく吸い込まれていきました。フィリピンでの生活はひどいものでした。ひっきりなしに襲ってくる敵機の攻撃の後では、相手をする兵士も殺気立ち、時には殺されるのではないかと思うほどでした。人数も多く、休む暇さえありません。一日が終わると、体中が痛み、そ

のままだひたすら眠りたいと思いました。そんなある日　　。

将校1　　お前たちは、これから兵士とともに移動する。

ナレーション　　わたしたちは、そそくさと軍服を着せられ、トラックに乗せられ移動を始めました。うわさで、もうすぐ米軍が上陸してくるそうです。そのために奥地に入るのです。そして、行く先々で小さな小屋が与えられ、そこがわたしたちの“仕事場”となったのです。軍人と行動を共にしていると、戦争の狂気を直接目の当たりにします。彼らは、本当に恐ろしいことをしていました。現地人の人に道案内をさせて、とある奥まったくぼ地のあるところにたどり着いた時のことでした。

捕虜　　兵隊さん、助けてください。

鈴木二等兵　　そんなことしてみろ。おれたちの居場所がアメリカ軍に知られてしまわあ。こういう手合いは殺すに限る。今までの道案内ご苦労さん。(そばの兵に)おい新兵、お前この銃剣で突いてみる。何、できない？ それでも日本軍人か！ 天皇陛下の命令だ。やれ！

玉枝　　鈴木さん？ 鈴木さんじゃありませんか。

鈴木　　だれだい？ あ、お前は、中国にいた...玉枝？ 何だい、おれが恋しくて追いかけてきたのかい？

玉枝　　鈴木さん、お願いします。その人を助けてください。ここなら安全です。その人のお陰じゃありませんか。どうぞ逃がしてあげて。

鈴木　　うん？ よし。おい、そいつの処刑はやめだ。逃がしてやれ。どうせ我々はすぐに移動する。その代わりに、おい、玉枝、今晚行くからな。うんとかわいがってやるぞ。

ナレーション　　あの時、鈴木さんをおかくまって捕らえられた日以来、実はその後生死も分からない彼のために、わたしはひそかに祈り続けていたのです。でも、わずか半年ばかりの間に、鈴木さんはずいぶんと変わっていました。今、目の前にいる彼は、まるで獣のようでした。戦争はこんなにも人を変えるものでしょうか。わたしは荒々しく彼に抱かれながら、指一つ触れずにわたしの身の上話を聞いてくれたあの時の彼の優しいまなざしを、悲しく思い出していました。

それから1週間たったある日、わたしたちは大地を揺るがすような艦砲射撃の音で目を覚ましました。いよいよ米軍の上陸が始まったのです。わたしたちは更に奥地へと移動しました。

(効果音)　　(艦砲射撃の砲声)

ナレーション　　軍の食糧は底を突き始め、食事をしない日が多くなりました。日本からの食糧の補給が途絶えたのです。このままでは飢え死にするしかありません。ある日、わたしたちは、部隊長に呼ばれました。

将校　　婦人の皆さんに告ぐ。今までよくぞ頑張って我々についてきてくれた。しかし、戦況は大変厳しいものがあり、もうこれ以上君たちを連れて歩くわけにはいか

ない。すまんが、ここで君たちは解散する。ただし、君たちも日本軍人であるから、敵の手に落ちるような卑きようなマネはしないでくれ。食糧をわずかだが置いてゆく。最期は潔くしてほしい。以上。

- 慰安婦 1 冗談じゃないわ。わたしたちを散々使っておいて、要らなくなったらポイですか。こんなジャングルの中から、どうやって帰るんですよ。日本兵のバカヤロー！
- 玉枝 ねえみんな。最後まで希望を持って頑張りましょう。何とかなるわよ。
- 慰安婦 B 希望を持って頑張るって、当てでもあるのかい？
- 玉枝 そうね。亡くなったわたしの父は牧師で、いつも「イエス様は、どんな時にも共にいて助けてくださる」と言っていた。わたしはそれを信じて今まで頑張ったわ。だから、気をしっかり持って脱出しましょう。
- ナレーション その時、そこにいた女性は5人でした。そして、それから約1か月にわたるジャングルの逃避行が始まったのです。食糧は、わずかな米と携行食1週間分。生の米を少しずつかみながら飢えをしのぎ、携行食はいざという時のために取っておきました。ジャングルは暗く、雨にぬれると着物は乾かず、次第に体力が衰えていきます。そして、ジャングルで恐ろしいのは山ヒルの襲撃です。山ヒルは大きく、体に吸い付くと血を吸って膨れ上がります。ナイフで切り裂きはがすと、傷口が膨れ上がり、ザクロのようになります。やがて携行食に手を付け、それもほとんど食べ尽くすと、トカゲや虫、木の根など、何でも食べました。それでもわたしは、わずかな携行食を残して持っていました。ジャングルには、ところどころに日本兵の死体が転がっています。そして、そのあるものは、足の肉が切り取られていました。
- 慰安婦 1 だれか来るわ。
- 慰安婦 2 アメリカ兵かしら。いや、日本人みたい。日本語話している。
- 慰安婦 1 よかったじゃないの。きっと助けてもらえるわ。
- 日本兵 1 おお、女じゃないか。
- 日本兵 2 久しぶりだなあ、女に会うのは。
- 玉枝 あ、鈴木さん。
- 鈴木 おっ玉枝。お前まだこんなところにいたのか。
- 慰安婦 1 わたしたち、日本軍に見捨てられたのです。どうぞ、連れていってください。
- 鈴木 お前ら、食糧は持っているのか？
- 慰安婦 2 いいえ、もう全部食べてしまいました。
- 鈴木 そうか、それは残念だったなあ。食糧があれば連れていってやるが、なけりゃ足手間問いになるだけだ。
- 日本兵 1 鈴木上等兵殿。いっそのこと、こいつらを食糧にしまっちゃどうでしょうね。どうせ生きて帰っても日本の恥、お国のためにはならないんですから。
- 慰安婦 1 何言ってるんだよ！お国のため、お国のためって。今までお国はわたしたちのた

めに何をしてくれたんだい？ 人をオモチャのように扱いやがって、要らなくなりゃ捨ててしまう。食糧なんか、たとえ持ってたって死んでもやるもんか。

日本兵 2 ほう、食べ物を持ってるのかい。それなら出してもらおう。それでなけりゃお前たちを殺して…。

玉枝 やめてください。わたしの食糧をあげます。

鈴木 玉枝、お前は物持ちがいいんだな。お前みたいなやつを女房にしたら、幸せになれるぜ。

玉枝 鈴木さん、あなたはずいぶんと変わりましたね。初めて会った時のあなたはそうじゃなかった。

鈴木 戦争が変えたのよ。おれだってこんなふうにはなりたくなかった。だがな、軍隊にいたら、みんなそうなんだ。きれい事じゃ生きてはいけないんだよ。

日本兵 1 鈴木上等兵殿。こんなところで手間取ってちゃ、フィリピンのゲリラに見つかりやしませんか？

鈴木 そうだな。玉枝、すまんが食糧もらってくぜ。

慰安婦 2 玉枝さん、やっちゃダメよ。あなたが、食べるのを我慢して今まで持ってきたんじゃないか。日本人はか弱い女のものを取り上げて恥ずかしいとは思わないの？

日本兵 2 うるせい！ こっちによこしやがれ！

(効果音) (「ババーン」と小銃音数発)

ナレーション その時でした。潜んでいた敵に撃たれたらしい鈴木さんが、わたしのほうに倒れかかってきました。でも、わたし自身も、肩の辺りにしびれるような痛みを覚えて、そのまま崩れるように倒れると、意識を失ってしまいました。

(音楽) (重苦しい感じ)

< 後編 >

第5場 米軍の病院

米軍軍医少尉 気がつきましたか。ずいぶん長く眠っていましたね。痛みますか？

玉枝 ここは、一体どこですか？

少尉 安心しなさい。ここは米軍の病院です。あなたはジャングルの中で銃で撃たれたのですが、幸い傷は浅く、助かったのです。

玉枝 ほかの仲間は？

少尉 全員無事で、ほかの病院に収容されています。

玉枝 日本の兵隊さんは？

少尉 フィリピンのゲリラと銃撃戦になり、全員死にました。

玉枝 鈴木という兵隊がいたでしょう？ あの人もですか？

少尉 名前は知りませんが、一人だけ、かろうじて助かった兵隊がいます。その人があなたの前に立ちふさがったので、弾は右胸を貫通してあなたの肩にも当たっ

たのですが、あなたの傷は軽くて済んだのです。

玉枝 その人は、今どうしていますか？

少尉 この病院で手術を受けて、今、絶対安静で寝ています。

玉枝 助かるんでしょうか。

少尉 さあ、どうですかね。かなり出血してますから。

玉枝 あ、これをあの人に渡してくださいませでしょうか。

少尉 何ですか？ ほう、これは聖書ですね。あなたの持ち物ですか？

玉枝 はい、父の形見で、わたしの生きる糧でした。これだけは、と思って今まで持っていたのです。

ナレーション そう言ってわたしは、血と汗とほこりでボロボロになった聖書を差し出しました。それから3日後のことでした。

少尉 玉枝さん、すぐ来てください。鈴木さんが会いたいと言っている。

玉枝 どうかしたんですか？

少尉 この2、3日安定していたんだが、急に容体が変わって危ないんだ。

玉枝 (病室に駆け込み)鈴木さん、しっかりしてください！

鈴木 (弱々しく)ああ、玉枝さんか。僕は君に謝らなくてはならない。ずいぶんとひどいことをした。赦してくれ。

玉枝 何を言っているんですか。わたしこそ、あなたに感謝しなければならないんですよ。だって、あなたがわたしをかばってくれなければ、わたしが死んでいたんです。

鈴木 恥ずかしいことだが、あれは偶然だったんだよ。君の食糧を奪おうとして、弾に当たった。自分の罪の当然の報いを受けたんだ。でもよかった。これでわたしは、イエス・キリストの身代わりの死がどんなものか、身をもって知ることができた気がする。君の大事な聖書、ありがとう。読ませてもらったよ。ローマ書 5 章 6-8 節をもう一度読んでくれないか。

玉枝 (読む)「我らなお弱かりし時、キリスト定まりたる日に及びて、敬けんならぬ者のために死にたまえり。それ義人のために死ぬる者ほとんどなし。情けある者(原文“仁者”)のためには死ぬることをいとわぬ者もやあらん。されど我らがなお罪びとたりし時、キリスト我らのために死にたまひしによりて、神は我らに対する愛を表したまえり。」

鈴木 “されど罪びとたりし時、キリスト我がために死にたまえり...” 玉枝さん、君がまだ夕霧楼にいたころ、よくキリストの話をして、この箇所を読んでくれたね。その時の僕は、信仰のことも、自分の罪のことも、何も分からなかった。でも心のどこかには、いつもこの言葉が引っかかっていたんだ。考えてみると僕は、多くの人を殺した。そして僕のために親切にしてくれた君まで欲望の対象にしか考えず、殺そうとさえした。僕は、まさに“罪びとの頭”だ。

でも聖書によれば、そんな僕を愛し、僕のために命を捨ててくださった方がいた。その方は僕の身代わりに十字架にかかって、僕が負うべき罪の刑罰を受けてくださった。僕は今までその方を知らずにいた。しかし、君のお陰でその方に会えたのだよ。今までは日本の軍隊に従っていたが、これからはイエス・キリストを自分の主として従っていこうと思う。

玉枝さん。いやキム・ミョンシュクさん。今まで本当にありがとう。君に出会えてよかった。でも、戦争がない時に君と会いたかった。そしたら、そしたら…。

ナレーション それが最期の言葉でした。

玉枝モノローグ “戦争のない時に会いたかった。そしたら、そしたら…” 鈴木さん、あなたの言いたかったこと、分かります。天国で、イエス様の下でお会いしましょうね、きっと。

ナレーション わたしは、安らかな鈴木さんの死に顔を見つめながら、そっと心の中でつぶやきました。

(効果音) (玉音放送。そのままバックに)

ナレーション 1945年(昭和20年)8月15日、太平洋戦争は日本の敗戦をもって終わりました。戦争は、人間がその罪のゆえに起こす罪悪です。そして、戦争ではいつも弱い人々が犠牲になります。この戦争では、軍人ばかりでなく、従軍慰安婦や従軍看護婦、一般市民など、多くの女性が犠牲になりました。そのほとんどは、ジャングルや孤島に打ち捨てられ、飢えや病気、そして自ら命を絶つなどして死んでいきました。そんな中でわたしは、何度も死にかけながら、不思議なみ力で守られ、生かされました。

その後わたしは故郷に帰り、父母の墓を守りながら、今日までひっそりと生きてきました。それは“暗やみの日々”でした。でもそれは、わたしだけではない。同じような悲しさと悔しさを秘めて、今日まで日陰の道を生きてきた何百という同胞の女性がいます。

あれからもう50年近く、その間わたしは、“どうしてイエス様はこんなに汚れてしまった自分を生かしてくださったんだろう”と、ずっと考えてきました。そして、やっとこのごろ思うようになったのです。“もう二度と戦争が起こらないように、戦争の犠牲となって死んでいったあの多くの人々のために、そして今も固く口を閉ざして語らない、いえ、語れない人々に代わって、神様が、この小さな者をお用いになるためではないかと”。

玉枝モノローグ (祈り)主よ、しもべはみ前におります。どうぞこの者に、真実を語る勇気をお与えください。人間の罪が、この真実を歴史のかなたに覆い隠してしまわぬうちに。そして、暗やみの中に、主の赦しの愛の光が輝き出るために。

< 完 >